

白駒妃登美の
なでしこ
歴史物語
10

日本の悠久の歴史をひもとけば、そこにはわが国を支えてきた「なでしこ」たちの存在があります。福岡の人気歴史家・白駒妃登美さんに、そんななでしこたちの知られざる歴史物語を紹介していただきます。

しらこまひとみ
博多の歴女 白駒妃登美

情けない藩だなあ——。実は、私も昔はそんな印象を抱いていました。でもそれは歴史に埋もれた真実を知らなかったからで、加賀藩に代々伝わる「慈愛」や「賢さ」に触れた時、私は心から感動しました。今回はその礎ともなった、まつのエピソードをご紹介します。

＊歴史の真実に触れて

徳川幕府の成立から二百六十年——。幕末には薩摩や長州、土佐などが明治維新を先導しますから、これらの雄藩を好きな方は多いかもしれません。でも、石高でいえば薩摩が七十二万石、長州が三十七万石、土佐が二十万石。前回からご紹介している前田家の加賀藩は百万石ですから、なぜ幕末にもっと加賀藩が活躍しなかったのか、疑問に思う方もいらっしゃるのではないのでしょうか。

——良妻賢母の鑑・前田まつ②

「慈愛」と「賢さ」を胸に

＊二百五十年続いた仕送り

話を再び、徳川幕府成立前後に戻します。利家とまつとの四女・豪姫は生後すぐに秀吉夫婦の養女となり、やがて備前岡山の大名家・宇喜多秀家と結婚しますが、彼は天下分け目の関ヶ原の戦いで敗れ、息子たちと共に八丈島に流されてしまいます。不憫に思うまつは娘婿や孫のために数百年の米を届けるのですが、実はこの仕送りについて、幕府は加賀藩に「七十五俵まで」と制限を出していました。このころといえば、幕府に盾突く藩が次々に取り潰され、皆が幕府の威光に息を潜めていた時代です。そんな男たちを尻目に、まつは公然と幕府に背いていたんですね。当時、江戸で人質生活を送っていたまつには、断固とした思いがあったのでしよう。たった七十五俵の米では育ち盛りの孫たち



前田まつ (1547-1617)

前田利家の従兄妹として生まれ、数え12歳で利家に嫁ぐ。実子が11人。利家の死後は出家して芳春院を名乗る。享年71は当時としては長命。

【イメージイラスト】
アオジマイコ